

凌雲閣物語

警察共済組合群馬県支部

伊香保の地名

最初の伊香保の地名は万葉集に見られます。万葉集は奈良時代末期の編纂であることから、この時代に伊香保の地名が存在していたことは推測できます。

万葉集の東歌(あずまうた)は東国14か国がその舞台となっていて、全230首の中で国名の分かるものが90首ありますが、この中で上野国(こうづけのくに:群馬県)が25首と最も多く登載されています。この25首の中で9首に伊香保の地名の記述があることには驚かされます。当時、伊香保一帯を支配していた豪族(有馬氏)の勢力の大きさと教養の高さが窺われます。

この時代、榛名山の地名は見あたりません。榛名の地名が最初に登場するのは平安時代の延喜式ですが、山塊ではなく榛名神社の名称であり、榛名山という山名の登場は戦国以降となります。伊香保誌(昭和45年発行)では、現在の榛名山全体を指して伊香保山と称していたと記述しています。万葉集への収録から推測しても、伊香保の地名は現在の温泉街の狭い地域ではなく、渋川から榛名山全体を包含した広い地域を称していたようです。

「伊香保」の名称の由来には諸説ありますが、「厳めしい嶺」から来たという説では、伊香保山が現在の榛名山全体を指していたとすれば、関東平野から望む厳然と聳える山塊の名称としては頷けるものがあります。

次は「イカツチの嶺」という説です。群馬県は、昔から雷が名物となっていますが、群馬の雷雲は、榛名山、赤城山、御荷鉾山(みかぼさん)での発生が多いことが古来から知られています。

「伊香保」の地名は前記理由などで頷けますが、気になるのは伊香保の「保」という文字です。御荷鉾も「ほ」であって、山岳の名称に「ほ」が充てられているもの多く見られます。穂高、武尊(ほたか)、高千穂などですが、稲穂が空に向かって突き出るように厳然と聳えている様を言うものであると思われれます。「保」がこれと同じ「ほ」であるとすれば、榛名山の山塊が古くは伊香保山と呼ばれていたという説は真実味を帯びてきます。

伊香保温泉

伊香保温泉は、榛山の北東に聳える二ツ岳の噴火の際に湧出したと言われていますが、群馬大



昭和27年当時の伊香保全景

学の尾崎喜左雄博士は、この噴火の時期を西暦600年頃と推測しています。東歌が読まれた当時、温泉の湧出量は多かったと思われるが、東歌9首の中に温泉の記述はなく、歴史の中に登場するのは室町時代以降です。

鎌倉時代、上野国の守護職として白井城にあった長尾氏が最初の温泉開発に当たり、戦国末期に配下の小暮、大島、永井、島田、後閑、岸、千明の7氏が共同経営を行いました。

その後、7家の末裔には「大屋」として広

大な土地や引湯権などの特権が与えられて独占的に温泉経営を行いました。

江戸時代には、一般庶民までが旅先として伊香保を訪れるようになり、寺社巡礼、湯治などの一大観光地として伊香保温泉は栄えていき、7戸の大屋は分家などにより12戸に、さらに享保の頃には14戸に増加することになります。民主化の波が押し寄せると、大屋に対して特権を持たない「門屋」との間に階級闘争的な対立が生まれました。

明治に入ると、政府高官、役人、実業家、外国人などとともに皇族も滞在するなど、伊香保温泉はますます有名になり、国際的な温泉保養地と性格を変えていくことになります。

伊香保温泉は、このように城主の配下である武士団が開発し、その末裔が温泉経営を担ってきたという歴史があります。参考図書：伊香保誌(昭和45年伊香保町役場発行)



昭和27年当時の伊香保温泉石段街

凌雲閣建設の経緯

現在の凌雲閣の地は、明治の頃小暮八郎氏(第8代伊香保町長)所有の土地で、古くから同家伝来の所有であったと伝えられていますが、戦国期に白井城主の命により温泉開発に当たった武士団に小暮氏の姓が見られます。凌雲閣の地を保有していた小暮家がこの末裔であるかは不明ですが、因縁めいたものが感じられます。

伊香保温泉は、江戸後期から明治、大正にかけて大いに賑わいました。江戸後

期には、寺社巡礼や湯治客などで繁盛し、明治以降は政府高官、役人、実業家、外国人なども訪れるようになりました。現在の凌雲閣は、当時、楽山館と称していましたが、明治12年8月には明治天皇の母君の英照皇太后も行啓・逗留された記録があります。楽山館は、その後「凌雲閣」、「千歳館」と屋号を変えていきました。

大正9年8月30日、伊香保の温泉街は大火に遭遇し、町並の70%が消失してしまいましたが、この際、楽山館(凌雲閣あるいは千歳世館か)も全焼してしまいました。当時の所有者であった勢多郡桂萱村の須賀氏は、栃木県日光町にあった建物を解体し、これを材料として旅館を再建しました。

その後、土地と建物は、数名の所有を経た後、大正13年7月、群馬大同銀行の抵当物となり、昭和12年3月、北群馬郡の小淵氏以下3名が競売によってこれを譲り受けました。昭和27年、警察共済組合群馬県支部は、この3者共有の土地・建物を買収したものです。

昭和27年5月21日、警察共済組合福祉事業資金として東京管区内に880万円の割当額が決定し、管区内各都県警察にこの施策を施行するための資料の提出が要請されました。これを受けて、国家地方警察群馬県本部では伊香保町に保養所を建設する案を管区本部に提出しましたが、この案

では、地の利があり既設の建物も存在していたことから管区内で最も有望となりました。管区警務部長が中心となり視察が行われるとともに、地元警察署長による所有者への交渉の結果、伊香保町への保養所建設が内定しました。

建設資金は、共済組合から330万円の拠出が決定し、200万円の県費補助の要請、さらに、不足する100万円を各警察署からの拠出金として割り当てることについて、県下署長会議の席上で承認されました。これにより予算の目処がついたことから、昭和27年8月12日、土地・建物・温泉権売買の仮契約が締結されました。

このような経過をたどって昭和27年11月4日改修が完了し、「凌雲荘」と命名された警察共済組合伊香保保養所において開所式が開催されました。

建設経費の概要は次のとおりでした。

・ 土地、建物、温泉権の買収	4 1 5 万円
・ 改修工事	1 1 8 万円
・ 設備品購入費	9 1 万円
・ 雑費(保険料、開所式費用等)	2 0 万円
合 計	6 4 4 万円



昭和28年12月 新装なった凌雲荘



改修なった凌雲荘に真新しい看板設置



開所当時のスタッフ



凌雲荘開所式会場

(正面は、国警本部、管区、県知事等の来賓。左側の席には、県下警察署長の名札が見られる。)

凌雲荘は、昭和38年、現在の玄関のある部分が鉄筋コンクリート4階建てに、東側部分は同じく宴会場、浴場などの平屋建てに改築されるとともに施設名が「凌雲閣」と改められ、昭和63年には東側部分が鉄筋コンクリート4階建てに改築されるなど、幾多の改築・改装を経て現在に至っています。

現在の凌雲閣の概要は次のとおりです。

建 物 鉄筋コンクリート造 4階建(営業床面積 2668.81㎡)
 客 室 和室23室(10畳12室、8畳10室)最大収容人員103名
 その他 宴会場92畳 90名収容



現在の凌雲閣



大浴場